

小論文

受験番号	氏名
------	----

【問題】以下の文章を読み、問 1～2 に答えよ。

人間は習慣の生き物だ。日々ある環境の中、同じ行動を繰り返し過ごすうち、それがいつの間にか当たり前に、「常識」になる。ネクタイを締めスーツを着て満員電車で詰め込まれて職場へと向かう日々、その行動を繰り返すうちに何の違和も感じなくなり、それがすなわち働くことだと身体に染み込んでいくように。だが時に他者から、それが単なる思い込みだと指摘されると、今度はその日常への懷疑が生まれ、それが鎖のように思われて、「呪縛」と意識し始める……。「常識」か？「呪縛」か？それを決めるのはあなたの「意識」であり、その生活の背後には文化というコードの存在があり、社会の力学がある。そういう言い方もできるのではないだろうか。

AI の登場、社会への浸透は、実はこうした「意識」の転換ともつながっていると言っても過言ではない。ダイナミックな思考の転換の可能性をもたらすのも AI 登場の重要な意味だということが、本書に登場した四人の言葉から実感していただけたのではないかと思う。この「新たな知能」の誕生は、人間の認識の可能性と限界を浮き彫りにせずにはおかない。ある人間観を無意識のうちに前提として組み立てられている世界の「常識」が変わるということ。それは社会的な関係性の変化にもつながっていくことだろう。

「世界は数式で表現できる」と言うテグマークに倣えば、力学的な法則を組み合わせることでこの世界の現象は記述できる。一方で日々私たちの生活を取り巻いている「重力」は、ある種の「安定」「秩序」をこの世界にもたらしけているが、同時にそれはオセロゲームのように「呪縛」「抑圧」とも反転する読み替えができる。この「重力」がなくなった世界はどうなるのか？自然科学の領域で考える途方もない夢のように思えることが、いつの間にか社会の構造や人間の認識、さらに心の領域で起きているとしたら……？奇しくもデネットは「デカルトの重力」という表現を好んで用いるが、ここは虚心坦懐に現実の変化を見つめ、未来への想像力を豊かにしていく他ない。

「AI 以後」。ここでは、まず本書の冒頭に掲げたいくつかの問いをめぐって、四人から発せられた言葉を比較し、つなげてみることで生まれる展望を整理してみよう。

(中略)

人間の知能を模倣し、人に代わる働きを行うことを目指す技術、人工知能＝AI。

知能を「目標を達成する能力」と定義するテグマークは、情報処理という分野に限れば、人間よりはるかに高度な知能を持つ AI を生むことは十分可能だと語る。ウォラックもその点は否定しない。しかし、AI を「不完全な鏡」に喩え、鏡は私たち自身と人工物との違いを映し出すとほのめかし、その大きな違いの一つが「私たちは自ら規範を決める」ことだと指摘する。デネットはさらに過激だ。AI の知的な能力は、「自律性」と言えるところまで高まる可能性があるが、その「自律性」は人を「あざむく」とことと背中合わせだと言う。そしてケリーは、その自律的な動きを「テクニウム」と名づけ、機械独自の論理として捉えるべきだと指摘し、その可能性を提唱する。

ちなみに、「人工知能は人間の最後の発明になる」というニック・ボストロム（オックスフォード大学教授）の言葉がある。つまり「人間の知能の模倣」が完璧に行われれば、結果、その知能は人間より優秀な成果をあげ続け、ある意味、人間は考える必要がなくなるというわけだが、その段階まで行くのかどうか？ それについては四人とも微妙な見解の相違がありそうだ。

人間の代わりに、ある目的に基づく情報処理をしてくれる存在、高度な人間以上の情報処理能力を持つ存在であることについては共通する理解のベースを持つ四人だが、そこに「自律性」という概念を持ち込んだ途端に、かなりデリケートなニュアンスの相違が生まれるのだ。

出典：丸山俊一『AI 以後 変貌するテクノロジーの危機と希望』、NHK 出版、162－164、2019 年、一部改変

問 1. 本書に登場する「四人」とは著名な学者（物理学者、倫理学者、哲学者等）のことである。その 4 人の名前と AI についての考えを要約せよ。

問 2. 10 年後に、人間と AI はどのような関係になっているか、あなたが想像して、その内容を 400 字以内で述べよ。